

青木繁の晩年九州時代の資料紹介

- (1) 石橋美術館購入の資料 植野健造
- (2) 青木繁の新聞挿絵について 後藤純子
- (3) 松田諦晶資料に見る青木繁の足跡 森山秀子

はじめに

石橋美術館では、平成14(2002)年から翌15年にかけて、洋画家・青木繁(1882-1911)に焦点をあてた二つの展覧会を開催した。すなわち、平成14年11月16日から平成15年3月16日まで開催した「青木繁・坂本繁二郎生誕120年記念 筑後洋画の系譜」展と、平成15年5月20日から7月6日まで開催した「青木繁と近代日本のロマンティズム」展である。後者の展覧会は、東京国立近代美術館との共同企画によるものであり、東京会場では、久留米会場に先だち3月25日から5月11日まで開催された。おりしも平成14年は青木繁の生誕120年にあたり、この「夭折の天才画家」の生涯と芸術の内実を再検証し、その芸術を近代日本美術史の中であらためて位置づけるよい機会となった。

青木繁の生涯と芸術についてはこれまでに多くの研究、著作があり、資料についても主要なものはすでに何らかのかたちで一般に紹介されていると考えてよいだろう¹⁾。しかし、研究者や一般の美術愛好家に幅広く関心を集める青木繁研究においては、新出資料や新事実の発見が今日なお報告されることも珍しいことではない。石橋美術館でも今回のこの二つの展覧会の準備段階でいくつかの新知見をもたらす資料と出会うことができた。本稿では、それらの資料の紹介をおこない、そこから導かれる青木繁の生涯や芸術についての新知見や問題を提示してみたい。(植野)

(1) 石橋美術館購入の資料

石橋美術館では、平成14(2002)年3月に青木繁に関する資料4点を購入した。それらは、1「青木繁書簡(明治43年11月22日付 青木鶴代、たよ子宛)」, 2「青木まさを書簡(明治44年12月24日消印 福田豊吉宛)」, 3「青木繁写真(幸彦を抱いた)(明治38年9月撮影)」, 4「青木繁写真(明治40年撮影)」, である。これらの資料は、平成14年1月に福岡市の古書店に売りに出されたもので、それらを石橋美術館が購入したものである²⁾。以下にこれらの資料について簡単な解題を加えたい。

1. 青木繁書簡 (fig.1)

明治43年11月22日付 青木鶴代、たよ子宛

紙本墨書、卷子装

書簡部分：縦 17.4×長さ 220.9cm

封筒部分：縦 17.4×長さ 14.8cm

(紙継5紙：長さ1紙18.5cm 2紙60.3cm

3紙60.3cm 4紙60.3cm 5紙21.5cm)

(解題)

鶴代(ツルヨ)は青木繁の姉、たよ子(タヨ)は妹。本書簡は、青木繁が死去する前年、入院中であった福岡東中洲の松浦病院から姉妹に宛てた遺書とも言うべきものである。この書簡の文面は、青木没後の大正2(1913)年に刊行された『青木繁画集』(政教社)に収められた梅野満雄「憶青木繁君」の中で紹介されて以来、青木を語る際には必ず引かれる有名な文章である。しかし書簡の実物そのものはこれまで一度も世に登場したことはないとみられ、きわめて貴重なものである³⁾。ちなみに、久留米市の兎山(けしけし山)頂上の青木繁歌碑は、この遺言に應えるべく坂本繁二郎らが昭和23(1948)年に建立したものである。

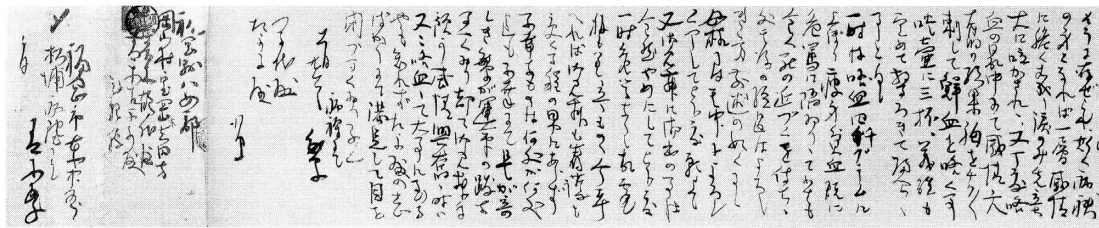
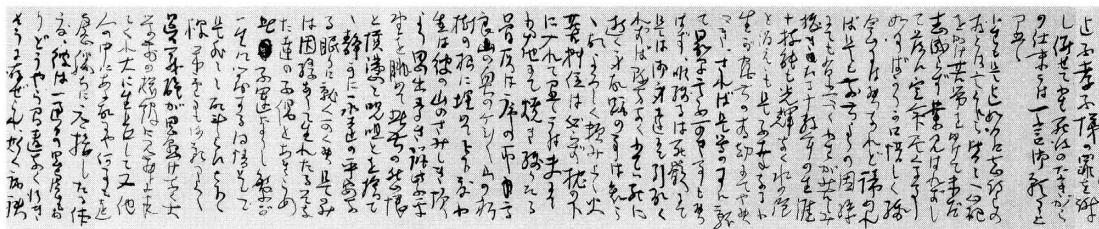
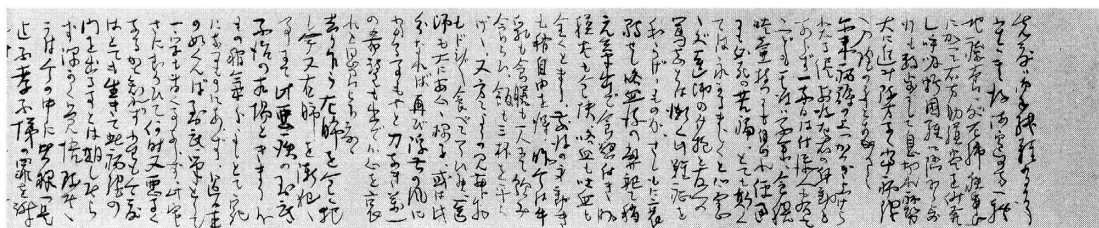


fig.1 青木繁書簡

明治43年11月22日付 青木鶴代、たよ子宛

(文面)

先度ハ御手紙難有存候。小生ハ其後海辺の方へ転地療養候処、左肺炎患に加へて右方肋膜炎を併発し、呼吸頗困難に陥り歩行も数歩にして息切れ、病勢大に進み、致方なく当病院へ入院の身と相成申候。爾来病褥の上へかつぎ上げられたる儘、前後左右の身動もならず、一兩日は付添人も有之候へども其後ハ不来、食膳痰壺持つにも息切れ便通にも必死の苦痛、とても斯くては永かるまじくと心念候処、医師の介抱と友人の篤志とは漸く此難症を和らげ候ものか、さしにも衰弱せし咯血後の弊軀も稍元氣出で、食慾付き、肋膜炎も全快、咯血も吐血も全くとまり、前後の身動さも稍自由を得、昨今は牛乳も食膳も一人にて飲み食らひ、飯も三杯を平らげ候。又方々よりの見舞物もドシドシ食べて了ひ候。医師も大に安心候様子、或は此分なれば再び浮世の風に当る事もやと力なき万一の希望も出で候心を哀れと思召被下度候。

去り乍ら左肺を全く犯し今又右肺を漸犯候事にて、此悪疾の到底不治の相場ときまり候もの、稍気分よしとて宛になるものにあらず。過日来の如くんば到底筆とりて一字も書く事ならず、此寒さにむかひて何時又悪くなるかも知れず、小生も今度はとても生きて此病院の門を出る事とは期し居らず、深かく覚悟致居候に付、今の中に皆様へ是迄不孝不悌の罪を謝し併せて小生死後のなきがらの始末二付一言御願申上置候。

小生も是迄如何に志望の為めとは言ひ乍ら皆皆へ心配をかけ苦勞をかけて未だ志成らず業現はれずして茲に定命尽くる事、如何ばかりか口惜しく残念には候なれど、諦めれば是も前世よりの因縁にても有之べく、小生が苦しみ抜きたる二十数年の生涯も技能も光輝なく水の泡と消え候も、是不幸なる小生が宿世の為劫にてや候べき。されば是等の事に就て最早言ふべき事も候はず、唯残るは死骸にて、是は御身達にて引取くれずば致方なく、小生は死に逝く身故跡の事は知らず候故よろしく頼み上候。火葬料位は必らず枕の下に入れて置候二付、夫にて当地にて焼き残したる骨灰は序の節高良山の奥のケシケシ山の松樹の根に埋めて被下度、小生は彼の山のさみしき頂より思出多き筑紫平野を眺めて、此世の怨恨と憤懣と呪詛とを捨てて静かに永遠の平安なる眠りに就く可く候。是のみは因縁ありて生れたるそなた達の不遇とあきらめ此不運なりし繁が一生に対する同情として、是非是非取計らひ被下候様幾重にも御願申上候。

過日義雄が思懸けなく大学前の旅館に見舞に来てくれ大に生長して又他人の中にある故にや、何事も遠慮勝ちに応接したる体度、彼は一通りの思慮もありどうやら間違なく行きさうに存ぜられ、斯く病疾の身となれば一層感情に脆く相成り涙のみ先立ち大に泣かされ候。又丁度咯血の最中にて感情亢奮の結果、胸をチクチク刺して鮮血を咯く事痰壺に三杯、義雄も定めて驚ろきて帰へり候事と存候。

一時は咯血四千グラムに上はり、瘦身貧血既に危篤に陥り候て小生も全く死の近づくを待ち候処、其後の経過はよろしき方前述の如くに候。母様には其中によろしく申して被下度願上候。又御見舞に御出の事は全然やめにして被下度、一時危篤なりし故電報も差立候ものの今考へれば、御見舞も看護も受くる程の男にあらず。不幸なものは何処が何処迄も不幸にて、是が奇しき繁が運命の跋なるべく候。却て御見舞に預かり感情興奮候時は、又又咯血して大事に至るやも知れず、たよ殿の志ばかりにて満足して目を閉づ可く候。不一。

十一月二十二日

病褥にて 繁

つる代殿

たよ子殿

侍史

(封筒)

福岡県八女郡岡山村室岡吉田方

青木鶴代殿

青木たよ子殿

乞親披

福岡市東中洲

松浦病院より

2. 青木まさを書簡 (fig.2)

明治44年12月24日消印 福田豊吉宛

紙本墨書, 卷子装

書簡部分: 縦 18.5×長さ 303.4cm

封筒部分: 縦 18.5×長さ 16.0cm

(紙継6紙: 長さ 1紙34.5cm 2紙60.3cm

3紙60.5cm 4紙60.5cm 5紙60.6cm

6紙27.0cm)

(解題)

まさを(マサヨ)は青木繁の母親, 福田豊吉は青木の恋人であつた福田たねの父親。青木は明治44(1911)年3月に松浦病院で死去したが, その年の暮れに八女郡岡山村のまさをから栃木県芳賀郡水橋村の福田豊吉に宛てた書簡。この書簡から, 母親まさをが青木が福田たねとの間に一子(福田蘭童)をもうけていたことを青木の死後も知らなかったことがわかり, 青木生前の様子や青木家の家柄などについても詳しく記されている。本書簡は, 昭和3(1928)年10月発行の『みづゑ』第284号所収の西田武雄「天才繁の母の手紙」において紹介されたものであるが, これも実物は一度も世に出たことはないと思われる貴重な資料である。



fig.2 青木まさを書簡

明治44年12月24日消印 福田豊吉宛

(文面)

謹啓陳者悴繁逝去に就ては特に御町重なる御吊詞に預り難有奉謝候然るに御紙面に依れば悴に一子ありて貴家御養育被下候よし実に驚愕仕候而かも已に就学致居候事思へば永の年月嘸かし御面倒の御事に候ひしならむ知らぬ事とは申乍ら未だ一度の御見へさへ申さず候へども御情深き御志の程奉深謝候、生家余りに芸芸に見入りて世故に疎くその行為多く常軌をはづれ、斯かる哀れの物語を遺して、身まかりつる悴の心情も察せられ今更の如く気の毒に至りに堪へず、予而何か深き憂の有るらしけれど父を喪ひし為か將た例の芸芸の上の事とのみ思ひ込みて、已に相当の年齢にも達し候事故夫れなれと嫁の詮議など致し充分勤め候ひしも何故か避け候故、左して無理にも申さず、田舎者にては到底六ヶ敷からむとて沙汰止みに致候ひしか夫れか妾の絶へざる苦勞に候ひつるを今にして考ふれば、斯かる話は悴を責むる針にて候ひつらむ思ひ及ばぬ事ながら、罪深き事為しもの哉嘸や草葉の蔭より怨み申さむ、思へば悲しき極みに候よ実に昔し語りには聞きも及びつれど、今文明の世に斯かる惨しき事の目のあたり吾が兄と孫との上に見むとは悴の仕わざのあしき故とは申乍ら生れてこの日まで永の年月、別けて近年は音信さへ打絶えて臨終の際まで、それを洩さず、強情我慢もこゝに到れば腹立しく、妾の何時までも幼き兄の如き心地して其処に思ひ到らざりしを悔ふるのみに御座候、抑も悴繁の妾の家に人と成りしか、不幸にてその上家の長男と生れ、後相続の重き責をは負ひつゝ、父は早く老衰して、悴上京頃の両三年は、その身も壮健に候ひしが腹黒き友達の証人に立ちて巨額の弁償を成ししか初めにて爾來ある事、成事、不運つゝ、卒業頃には、その身さへ自由ならず、後には弟妹多くして悴の身には、重き任の加れるのみその社会に立てゝは荒き波風に翻弄せられ瘦我慢をすれば為る程、深淵に陥り行往いよいよ非凡と成り数年の放浪生活に痛く神身を損ひ、夫の喪去に深き悲哀を覚え情緒いよいよ乱れ妾の申す事など、耳に入れず暫時家より放して思ふ儘に致させなど、氣も変らむ、年とりなば強情も止まむかと、妾は、子供引き具して実家へ参り二年過ぎ三年を過ぎ候中に定る妻も家も荒ら浪の把菰の地にさすらひ、酒に耽りて健康を害し後患を為すの責を作りしと思へば、皆妾の足らはぬ事故にて、返すかへすも遣る瀬無く、未だ見ぬ坊の事承りては、身も世も有らず、悴の忘れ紀念、只遭ひ度さに、夜毎に見る夢さめて悲しき、嘸慈悲なき婆よと怨みむも、何卒御宥し被下度世にはつらきつらき義理てふも

のの存すれば、今にも抱きて連れ来む、こゝろは山々なれど、不孝の兄を持つ親心の苦しさは御諒察被下度候、道遠しとは云へ、便利よきこの時節、必ず必ず御目に懸り厚き御礼を申述べ、可愛き孫の顔も見度く候へば、その兄の母上にも宜しく御申伝へ被下度、別封悴の小影、よく坊に御渡し被下度、何れ成人の上は、亡き父の遺志を嗣き、天晴その道の達人と成る様御申聞け被下度偏へに願上申候、何か悴の身に成りし絵画と思へど宅には無之、東京へ、問合せ候処、例の不始末にて、下宿へ、数百円の抵当に相成候由にて、一寸困難致居候併し何とかして、是非一面なりとも紀念を遣し度候へば左様御諒恕被下度候、終りに付記致す可きは、青木家の事にて有馬藩士にて世に茶道、礼法を以て藩公に仕へ、祖父宗龍殊にその道の堪能にて令聞あり、為めに深く同僚に忌まれ、藩主御秘蔵の金の茶ほうじを匿して罪を嫁し為めに百余日牢獄に呻吟し拷問、次第につのりて算盤責苦にまで遭ひつるを繁の祖母は、幼児を連れ水垢離を採り、只管神願してぬれ衣を解かん事を請ひしが禄は褫かれ悲惨の極に達せしか、天道永へに明にして犯人判明し、祖父は再び晴天白日却て面目を施せしか永き責苦の疲れと、一時に気の弛みし為か、間も無く幼児を胎して永眠し、祖母は、女の手一に幼児を養育する程に世は幕末の尊王論一世に囂々として禄を食む、夫の兄は佐幕に馳せ、夫は、尊王を唱へて西郷等と相往来し王事に微力を尽し、軍人として、立たむと為しか、藩公に捕へられ、後許され、京師に入り薩軍に加りしを祖母の切なる諫めに、遂に刀を棄てゝ、祖母に仕へて孝養を尽し、維新後の朝三暮四の時に当り法律を学びて、代言人を成し、以て今日に至りしものにて、その概略上の如く、位高き家には候はねど由緒正しき氏の長子にて候ひき本日は、四週日にて、太夜に相当し親戚相寄り仏事営み供養致し、永き永き手紙にて、言の葉つきず葬儀は、福岡病院より火葬に付して京地友人等の依嘱も有之延期して過ぐる火曜日の夕、父の側に懇ろに葬り候間、引続き法回等困難に取紛れ、御返事延引の段御宥恕被下度、終に望み、御全家様の御健康を祈上候

青木まさを
福田豊吉様
み許に

(封筒)

栃木県芳賀町水橋村東高橋
福田豊吉 様

福岡県八女郡岡山村室岡
青木まさを
(明治44年12月24日消印)

3. 青木繁写真(幸彦を抱いた) (fig.3)

明治38年9月撮影
写真:縦 9.0×横 5.9cm 台紙:縦 12.5×横 8.4cm
台紙裏面にインクによる書き込み:青木繁 幸彦
明治三十八年八月二十九日 生後二十一日目

4. 青木繁写真 (fig.4)

明治40年頃撮影
写真:縦 11.0×横 7.8cm 台紙:縦 16.0×横
11.0cm
台紙印刷:久留米市日吉町貳丁目 江上写真館
M. Egami
台紙裏面に墨による書き込み:梅野蔵 故青木繁
君

(解題)

3, 4ともに青木繁の画集、文集等に掲載される写真のオリジナルプリントとしてきわめて貴重である。3の台紙裏面のインクによる書き込みの筆跡は、青木のものではない。

以上がその概要である。これら4点の資料のうち、1と4は福岡県久留米市の青木家に、2と3は栃木県芳賀郡水橋村の福田家に当初はあったはずであるが、

その後の来歴の詳細については不明である。1と2は現在卷子形式に装丁されている。このように装丁された時期について、これらの資料の購入先である古書店社長の宮徹男氏のご教示によれば、1は昭和戦前期の装丁ではないかとのことであり、2については平成11年に古書店が入手されて以後に施されたものであるとのことである。また、これら4点は、先述「筑後洋画の系譜」展に出品展示され、1「青木繁書簡(明治43年11月22日付 青木鶴代、たよ子宛)」は「青木繁と近代日本のロマンティズム」展にも出品展示された。いずれも、青木の生涯を語るうえでの第一次資料としての価値はきわめて高いものと言えるだろう。

註:

- 1) たとえば、青木繁研究の基本文献として、青木の文章をまとめた青木繁『仮象の創造』(中央公論美術出版、昭和41年1月)があったが、最近、この内容に新出資料と青木の友人らの追悼文を増補した、『仮象の創造—青木繁全文集 増補版』(中央公論美術出版、平成15年6月)が刊行された。
- 2) これら4点の資料の紹介と売り立てのことは、『西日本文献目録 福岡葦書房古書目』第40号(平成14年1月)に掲載された。
- 3) 管見では、この書簡が展覧会において公開された例を知らない。また、刊行物においても、河北倫明『青木繁—悲劇の生涯と芸術』(角川書店〈角川新書〉、昭和39年10月)の中で写真掲載されているのが唯一の例ではないだろうか。



fig.3 青木繁写真(幸彦を抱いた)
明治38年9月撮影



fig.4 青木繁写真
明治40年頃撮影

(2) 青木繁の新聞挿絵について

1. 調査の発端

青木繁に関連する二つの展覧会の事前調査のため、石橋美術館では所蔵している地元新聞のマイクロフィルムや開館当初から実施している新聞スクラップ帳の中から青木繁に関する新聞記事の調査をはじめていた。ちょうどその頃、北原白秋研究家・調海明氏(福岡県大川市出身・東京都在住)により、明治40(1907)年青木繁が地方紙『九州日報』に「美術閑話」というタイトルで7回にわたって芸術論などを語っている記事が発見され、調氏は『白秋の証言 資料集12』でこれを発表し、青木繁の晩年を知る新資料として注目された¹⁾。

さらに調氏は『白秋の証言 資料集13』に「青木繁の新資料2」として『九州日報』に掲載された2編の記事の全文を掲載²⁾、さらに同資料集の中で、明治44(1911)年3月、佐賀師範学校を会場として開催された九州図画展覧会に青木繁が準備段階で関わった可能性を示唆し、これら一連の新資料から、従来語られてきた破滅的な青木繁の晩年のイメージに対し疑問を投げられた。

石橋美術館では青木繁が父の危篤の報を受けて九州へ帰省してから亡くなるまでの期間、地元の新新聞にまだ発見されていない青木繁の生前の記事がないか、また調氏の指摘にあるように青木繁が「九州図画展覧会」に関係していたことを示す記事がないか調べることにした。

2. 調査範囲と結果

石橋美術館では過去における地元的美術情報調査のため、明治から開館前までの『西日本新聞』(前身の『福岡日日新聞』も所蔵)のマイクロフィルムを計画的に購入している。今回明治40(1907)年～44(1911)年の『九州日報』のマイクロフィルムを購入し、同年間の『福岡日日新聞』とあわせて調査の結果、青木繁の挿絵6点を発見した。

また佐賀県立図書館にて明治44年の『佐賀新聞』のマイクロフィルムを閲覧の結果、「九州図画展覧会」に関係する記事の中で、青木繁に関する下記の記事を発見した。

「九州図画展覧会 既報の如く九州図画展覧会は来二十七八九の三日間午前九時より午後五時迄当師範学校内に於て開催せらるる筈なるが、出品図画は

在東京太平洋画会白馬会の水彩画協会等の油絵十五点水彩画四十三点共逸品多く、他に東京美術学校卒業者の製作品及現生徒の作品十九点あり。尚本県中学校図画教師の出品油絵六点水彩画一点日本画十点県外中等学校生徒作品三百余点県内同上五百余点にして悉く到着目下陳列に着手中なるが、小城中学出青木氏の作品は天下既に定評あれば陳列中の異彩なるべく市内有志よりの出品にかかる古画(三十点)も又貴重の品なりと云ふ。因に二十九日午前九時よりは東京美術学校長代理として出張の同校教授大澤工学士、中学校講堂に於いて一場の講演を為す由にて氏は美術装飾建築等に長じ本年巴里に於て開設されたる図画教育会に文部省より派遣されたる事あり。図画工芸教育に係るものは聴講差支へなしと」/『佐賀新聞』明治44年3月27日

文中に「小城中学出青木氏の作品は天下既に定評あれば陳列中の異彩なるべく」とあり、青木繁は小城中学出身ではないが、本記述は小城中学校(現佐賀県立小城高等学校)所蔵の青木繁『朝日』(明治43年作)が九州図画展覧会に出品されたものと思われる。なお、この記事には句読点がないが読みづらいのでそれを補った。

3. 青木繁の新聞挿絵

新発見の挿絵は次の6点である。

〈挿絵1〉(fig.5)

右手に酒瓶をもつ男の立像、画面外に「青木繁画」、∞のサインあり/『九州日報』明治41年1月7日5面

〈挿絵2〉(fig.6)

花と杯、タイトルなし、線で囲みカタカナでシゲルのサインあり/『九州日報』明治41年5月17日1面

*青木繁作か検討を要する

〈挿絵3〉(fig.7)

花とかたつむり、タイトルなし、線で囲みカタカナでシゲルのサインあり/『九州日報』明治41年5月29日1面 *青木繁作か検討を要する

〈挿絵4〉(fig.8)

柿の木々が手前に描かれ奥に数軒の農家と森林、「西肥の秋色(其一)」,画面に「柿の村」の文字

と∞のサインあり / 『福岡日日新聞』 明治42年10月28日5面

〈挿絵5〉 (fig.9)

山間の風景, 画面外に「西肥の秋色(其二)」, 画面に「天山路」の文字と∞のサインあり / 『福岡日日新聞』 明治42年11月2日5面



fig.5 〈挿絵1〉『九州日報』
明治41年1月7日5面



fig.7 〈挿絵3〉『九州日報』
明治41年5月29日1面



fig.9 〈挿絵5〉『福岡日日新聞』
明治42年11月2日5面

〈挿絵6〉 (fig.10)

家屋と傘をさした人物の後ろ姿, 画面外に「西肥の秋色(其三)」, 画面に「温泉村」の文字と∞のサインあり / 『福岡日日新聞』 明治42年11月6日5面³⁾

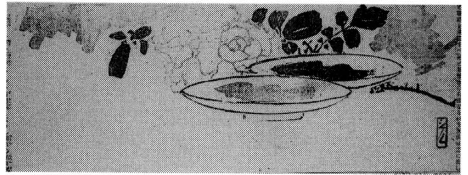


fig.6 〈挿絵2〉『九州日報』 明治41年5月17日1面

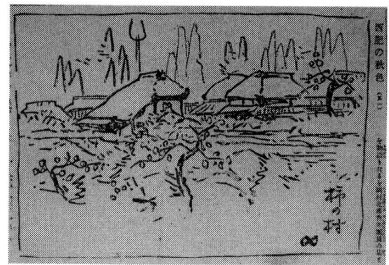


fig.8 〈挿絵4〉『福岡日日新聞』
明治42年10月28日5面



fig.10 〈挿絵6〉『福岡日日新聞』
明治42年11月6日5面

以上の調査結果は「青木繁と近代日本のロマンティシズム」展図録の年譜、文献目録に反映された。

4. 挿絵のサインについて

青木繁は雑誌や詩集などに挿絵を描いているが、その中のいくつかには∞のサインが見える。今回の調査の際、そのサインが青木繁の挿絵の発見に役立った。

青木繁の∞のサインについては、『青木繁画集』（政教社、1913年4月）の絵画目次の後に附記として次のように書かれている。

二.款記について。

(省略)其外単にS-Aと署し、また羅馬数字の8字を横にしたるが如き符標を用いたるもあり、『春鳥集口絵』はその例なり。こは坂本氏の言に依れば、二圈(「圈」は「まる」の意：後藤補)を繋ぎたるものにして、当時青木、坂本、森田の三氏連盟の符標として、森田氏は三圈、坂本氏は四圈を用うべき定めなりしが、この発案も余り実行せられずして止みたるなり。(省略)

ところで岩野美衛(泡鳴)の詩集『夕潮』(日高有隣堂、1904年11月)と中村吉蔵著『旧約物語』(金尾文淵堂、1907年1月)は青木繁の挿絵を含んでいることがよく知られているが、その中の次の2つの図版(fig.11, 12)はこれまで紹介されていない。これもサインから青木繁によるものとわかる。

今後も青木繁がく挿絵2, 3> (fig.6, 7)にある「シゲル」というサインを他に使用している例がないか調査を進め、この挿絵が青木繁によるものかどうか明確にしたい。

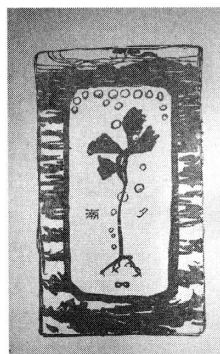


fig.11 『夕潮』扉絵(海藻)
野田宇太郎文学資料館蔵



fig.12 『旧約物語』装幀

註：

- 1) 「美術閑話」は『仮象の創造—青木繁全文集 増補版』(中央公論美術出版、平成15年6月)に収録された。
- 2) 「洋画大家来る(青木繁の帰省)」/『九州日報』明治40年10月4日4面
「青木画伯の談片」/『九州日報』明治40年10月6日4面、これも『仮象の創造—青木繁全文集 増補版』に収録。
- 3) 挿絵6については、平成15(2003)年4月15日から5月5日、福岡県八女郡黒木町「学びの館」で開催された久留米出身の青木繁、坂本繁二郎、高島野十郎の未公開作品展示において、おなじ構図の青木繁のスケッチが展示されており、下記新聞記事に図版が掲載されている。

『西日本新聞』2003年4月13日

『朝日新聞』2003年4月17日

『毎日新聞』2003年4月18日筑後版

『読売新聞』2003年5月4日筑後版

(3) 松田諦晶資料に見る青木繁の足跡

久留米生まれの洋画家、松田諦晶(本名は実、1886-1961)は、同郷の青木繁(1882-1911)、坂本繁二郎(1882-1969)より4歳年下、古賀春江(1895-1933)より9歳年上で、年代的にはこの3人の画家にはさまれた形である。彼は、草創期の二科会に入選を果たした経歴を持つが、二科賞を受賞した後輩の古賀にバトンを渡すかのように、中央画壇から身を引いてしまう。そのせいか、上記3人の画家に比べると、その名は広く知られてはいないが、青木と古賀は早世、坂本は近郊の八女に転居したのに対し、彼は生涯郷里にとどまり、後進の指導にも熱心だったため、久

留米の洋画界ではむしろ3人よりも直接影響力をもった画家であったと言える。

松田は、制作の上でも3人の画家から触発されることが多かった。だからこそ、彼の作品が心ない者の手で、ある時は青木の作品に、あるいは坂本の作品に、また古賀の作品に擬せられることもあったのである。

松田が残した作品アルバム、日誌、スケッチブック、彼あての書簡などの資料類を石橋美術館は所有している¹⁾。その資料類から、松田と上記3人の画家との関わりをたどることは可能である。なかでも、坂本と古賀に関しては、松田が受けとった書簡類が残っているし、彼の日誌にはこのふたりの名前がたびたび記されている。松田は、21歳の頃から、坂本に作品の批評を請うこともあった。古賀からは「ミーちゃん」と言って慕われ、ひんぱんに行き来し、一緒に写生に出かけることもあったほどである。このふたりの画家との関わりに比べれば、青木繁との関わりはそれほど深いようには見えない。と言うのも、松田が青木と接することのできた期間は、青木が久留米に帰省してから亡くなるまでの約5年間に限られ、しかもその間、青木は久留米に定住するわけではなく九州各地を放浪することが多かったからである。しかし、松田が残した資料は、没後なお青木が松田に対して大きな影響力を持ちつづけたことを物語っている。

松田資料のなかの青木関連資料をまずは下に列記し、その後、詳細に触れながら若干の考察を加えていくこととする。

1. 松田資料のなかの青木関連資料

〈資料1〉 明治40年1月30日～大正元年12月21日の日誌。この日誌は、当初のものではなく、松田自身によってのちに整理されたもののようである。

〈資料2〉 明治44年5月～12月のスケッチブック

〈資料3〉 明治45年・大正元年7月31日～大正2年4月

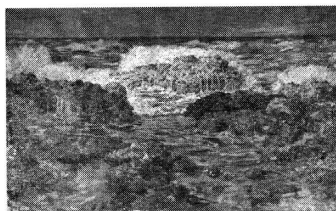


fig.13 松田諱品《壱岐の赤瀬》
1910年 油彩・カンヴァス

5日のスケッチブック

〈資料4〉 大正2年3月～大正3年3月の日誌。この日誌は、松田自身の書簡の写しからなる。

〈資料5〉 昭和6年の日誌

〈資料6〉 昭和23年の日誌

〈資料7〉 昭和34年8月1日～昭和35年、36年の日誌。

この日誌の表紙には「老いゆく日」と記されている。

〈資料8〉 明治42年6月～10月のスケッチブック

2. 青木の死まで

青木生前の両者の関わりについては、現時点では、松田の日誌(資料1)に2カ所確認できるのみである。明治42(1909)年8月17日の「緋事務所出勤中正午青木繁氏より電話あり。金の相談なり」という記述と、明治43(1910)年2月23日の「事務所の帰途午後二時半、両替町本荘古書店にて、青木繁氏の油絵を見る」という記述である。この時期、松田は、久留米緋同業組合に書記として勤めていた。「事務所」とあるのは、この緋同業組合の事務所のことである。残念なことに、松田のスケッチブックには後者の記述と対応するスケッチが残されておらず、松田が見た青木の油絵を特定することはむずかしい。もし推測を許されるならば、この年、松田は海を描く機会があったことから、松田が見た青木の絵とは海を描いた絵でなかったか、という推測もできよう。松田は、4月は唐津へ、8月は壱岐に出かけており、たとえば、壱岐での制作になる《壱岐の赤瀬》(fig.13)には、青木の海の絵からの影響が明確に見てとれるからである。

さて、次に出てくる記述はと言うと、明治44(1911)年3月25日、青木繁逝去に関する記述(資料1)である。「午前七時 青木繁氏逝去(於福岡九大附属病院)」という記述の後に、「おこたらぬ 永いたつきに瘦せし 頬 水鏡する春の雪どけ」という歌が記されている

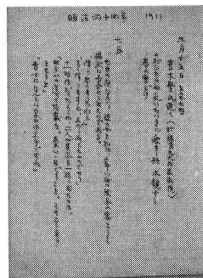


fig.14 明治44年3月25日の松田の記述
〈資料1〉 明治40年1月30日～大正元年12月21日の日誌

(fig.14)。簡単な記述であるが、青木の死が松田に衝撃を与えた様子が伝わってくるようだ。歌については、のちにまた触れることとする。

青木生前の両者の関わりは、青木の死後もつづくことになる。そもそも、青木との関わりは、松田ひとりの問題でなく、青木を知る者にとって、青木がいかに大きな存在であったかを物語るひとつの例にすぎないとも言える。

3. 青木没後(大正まで)

青木が亡くなった年の10月、松田は、青木作品を見せてもらう機会があった。「中学生武田(安)君の案内にて三潁郡三又村鐘ヶ江中村綱二氏を訪ね、故青木繁氏遺作『晩婦』を見る」と彼の日誌(資料1)にある。「晩婦」とは、長く清力酒造にあり、現在は(財)ウッドワン美術館所蔵となっている《漁夫晩婦》(fig.15)のことである。松田のスケッチブック(資料2)にその時描かれたと思われるラフスケッ

チが残されている(fig.16)。さらに、その同じスケッチブックには、大変興味深いデッサンが2点含まれる(fig.17, 18)。2点とも、9月頃に描かれたと思われる。いずれも目と口を大きく開け、体をくねらせる女性の群像で、たとえば、『方寸』5巻3号(明治44年7月)に掲載された青木のデッサン(fig.19, 20, 21)を連想させ、青木からの影響を強く感じさせる。松田が青木のどの作品から触発されたのか特定はできないが、この『方寸』5巻3号は、青木繁を特集したものであり、松田がこの号を見逃したはずはないだろう。さらに、ここでも推測が許されるなら、松田は青木の女性群像を何らかの方法で目にする機会があり²⁾、そこから創作欲をそそられ、さらに《漁夫晩婦》も見たいと思ったのではないか、という推測も成り立つかもしれない。

次に、明治45(1912)年3月16日の記述に「文展の南氏の絵を美術新報で見ました。平和で気持ちよさ相て成効[成功]の作だと思はれます。然しこれは南氏の様な境遇であり性格の人としての事で、若し



fig.15 青木繁《漁夫晩婦》1908年
油彩・カンヴァス(財)ウッドワン美術館蔵

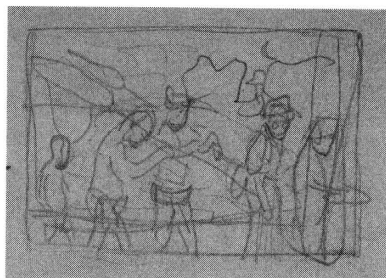


fig.16 松田による《漁夫晩婦》のスケッチ
〈資料2〉明治44年5月～12月のスケッチブック

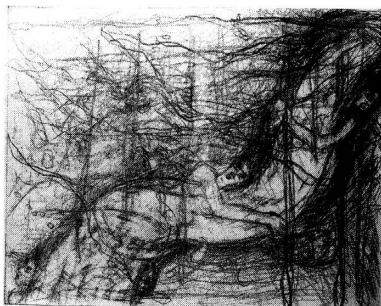


fig.17 松田のデッサン
〈資料2〉明治44年5月～12月のスケッチブック

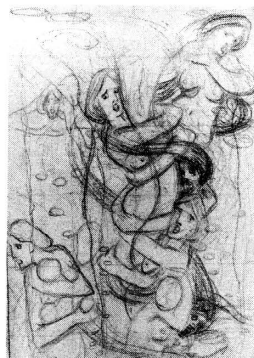


fig.18 松田のデッサン
〈資料2〉明治44年5月～12月のスケッチブック

青木さんの様な境遇の人で青木さんの様な性質の人が、これと同様の絵を描いたとしたら、私はおかしな事だと思ひます。(以下略)」とある(資料1)。この記述は、兄にあてた書簡の写しかと思われる。松田は、スケッチブックや日誌の中に書簡の写しを残している場合が多い。それはともかく、この記述で触れられている「文展の南氏の絵」とは、南薫造の第5回文展出品作《瓦焼き》のことを指している。さらに「青木さん」とは青木繁のことであろう。南薫造の作品についての感想を述べる際に、青木繁のことを引き合いに出すあたり、青木のことが松田の中で意識されていたことの証ととらえることができる。

次に明治45年7月初旬のメモと思われるものが、スケッチブックに残されている(資料3)。「青木繁氏 おこたらぬ 永いたつきに瘦せし頬 水かかみする春の雪どけ」というメモである(fig.22)。「おこたらぬ」で始まる歌は、「水鏡」か「水かかみ」かの違いはあるものの、先に松田の日誌に記されていた歌と同じである。さらに松田は、46年も後になって、

この歌を「青木繁と筑後の画壇」という文章で紹介している³⁾。「当時地方新聞には東中洲松浦病院に於てと報道し辞世の歌として掲載されてゐた『放浪の長いたつきに瘦せし頬水鏡する春の雪消け』の記憶が今も甦つて来る」という紹介文である。日誌やスケッチブックに記されていた歌とは少し違うけれども、これも同じ歌だと思われる。放浪の果て病を得てやせ衰えたわが身を嘆くさまが歌われている。以上のように、この歌は、松田の記述のなかで語句が少しずつ異なり、掲載紙を確認できていない現時点では⁴⁾、正確なところを記すことはできないが、今まで紹介されたことのない歌として、また松田が言っているようにあるいは当時の新聞が報じていたように青木辞世の歌として注目される。

大正2(1913)年6月11日付佐野年一あて書簡(資料4)のなかで、佐野と古賀春江の絵を見ての感想を述べるところがあるが、そこでも松田は坂本繁二郎や青木繁のことを引き合いに出さずにはおれなかった⁵⁾。世間受けのよい看板絵を描くことが幸福であ



fig.19 青木のデッサン
『方寸』5巻3号(明治44年7月)に掲載



fig.20 青木のデッサン
『方寸』5巻3号(明治44年7月)に掲載



fig.21 青木のデッサン
『方寸』5巻3号(明治44年7月)に掲載

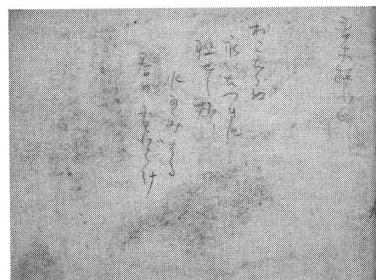


fig.22 明治45年7月初旬の松田によるメモ
(資料3) 明治45年・大正元年7月31日～
大正2年4月5日のスケッチブック

るか不幸であるか、という自問自答のなかで坂本や青木の名前が出てくるのである。古賀はこの書簡のなかでは当事者と言ってよく、坂本は、当時松田と行き来があったのでここで出てきても不思議ではないが、青木はすでに亡くなっているにもかかわらず、まだ松田にとって意識すべき存在であったことがわかるのである。

4. 青木没後(昭和)

その後の青木との関係を示す記述を松田の資料のなかを探っていくと、青木のことを知る松田のもとには、青木が残した作品についての相談が持ちかけられることもあったようだ。昭和6(1931)年6月25日、高島宇朗が松田のところに来て、所有する青木の作品を売りたいから世話をしてくれと頼んだ⁶⁾、という記述が、松田の日誌のなかにある(資料5)。「板よりもスケッチブックの小品がよい実に面白い」とある。

昭和23(1948)年4月25日、坂本繁二郎らの尽力で、久留米の兜山(通称けしけし山)に青木繁歌碑が建てられ、その除幕式が執り行われた。松田も式に参列したが、彼の日誌(資料6)には、「故青木繁歌碑除幕式参列」と記されるのみである。

昭和34(1959)年12月1日、松田は、自分のスケッチブックに青木が描いた自画像を手放すことにした(資料7)。その青木の自画像があったと思われるスケッチブック(資料8)には、確かに1枚だけ切り取っ

た跡がある(fig.23)。残された下のページには、上から強く押すことによってできた線の跡が残っており、その図柄から、松田が手放した青木の自画像は、晴明会館所蔵の《平島氏像》(fig.24)であることが確認できる。この《平島氏像》は、以前は青木晩年の自画像とされ、現在明治43(1910)年の作とされているものである。ところが、もとの松田のスケッチブックは、明治42年の6月から10月まで使用されていたものであり⁷⁾、制作年については、再考が必要かもしれない。モデルとされる平島信は、当時小城中学校の図画教員をしていた人で、青木は彼のもとに寄宿していたと伝えられる。松田が青木の自画像だと言っていたのは、彼の思いこみであった可能性もあるだろう。ここでは、モデルの問題や制作年の問題は、これ以上深く考察しないことにして、スケッチブックそのものに目を向けたい。

下のページに、これほど強く線の跡が残るのは、まさしく青木の筆であることを示している。強い筆圧は、青木のデッサンの特徴と言ってよい。同じスケッチブックの次のページに強い筆圧で描かれたデッサンがあるが(fig.25)、これも青木の手になる可能性が高い。

それにしても、松田のスケッチブックに何故青木がデッサンを描いたのか、あるいは青木のスケッチブックを松田が譲り受けたものなのか、謎が多い。松田が日誌に記していない青木との関わりもあったかもしれない。この時期明治42年の松田の記述に、「絃事務所出勤中正午青木繁氏より電話あり。

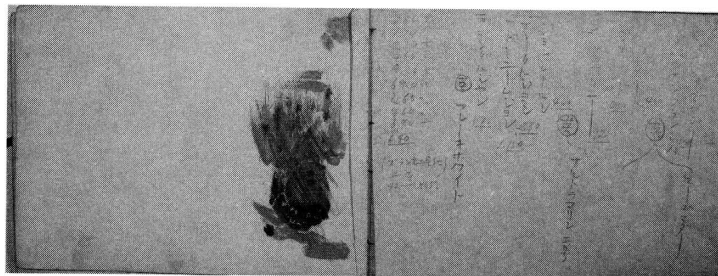


fig.23 切り取られた跡のある松田スケッチブックの1ページ
〈資料8〉明治42年6月～10月のスケッチブック

金の相談なり」とあったが、青木のデッサンとこの「金の相談」とは対応するものなのか、これも想像の域を出ない。

松田と青木の関わりを示す資料はけっして多くはない。しかし、ふたりの関わりが結局は松田の死の直前までつづくことを伝えるには充分とも言える(スケッチブックに描かれた青木の自画像を手放した翌々年に松田は亡くなる)。松田が残した資料のなかに青木の足跡をたどる作業を通し、松田のなかではもちろんのこと、久留米における青木の存在の大きさに改めて直面した感がある。

註：

- 1) 松田資料の全容については、昭和60(1985)年に石橋美術館で開催された「生誕百年記念 松田諦晶展」カタログ巻末の「松田諦晶資料」を参照。
- 2) 必ずしも図版を通してとは限らないだろう。たとえば、この明治44年には、福岡市においてアカシア会洋画展覧会が開かれ(7月18日～25日)、青木の作品も参考品として出品されたようであるので、実際に作品を目にした可能性も考えられよう。
- 3) 『櫨』no.5(青木繁特集), 昭和33(1958)年11月
- 4) 石橋美術館が所蔵する松田の資料のなかには、この

文章の原稿とそのための草稿と思われるものがあって、その草稿に、「郷土新聞切抜の断片(福日か九州日報?)で博多東中洲松浦病院とあり報道は大略読売と同文で、相違する処はただ『放浪のながいたつきに瘦せし頼水鏡する春の雪消』の辞世の歌が掲載してあつた様に記憶が甦つて来る」というくだりがある。松田の言う「地方新聞」は、彼自身のメモにもあるように『福岡日日新聞』か『九州日報』の可能性が高いと予想し、両紙に該当記事を探してみたが、残念ながら見つけることはできなかった。

- 5) 佐野年一は、古賀春江とともに松田に絵を習ったこともあり、当時東京で古賀と下宿を同じくしていた。
- 6) 高島宇朗は、詩人で青木の友人、青木の作品を多数所有していた。
- 7) このスケッチブックの表紙に「明治四十二年 自六月至十月」と彼自身が記している。

(うえのけんぞう、ごとうじゅんこ、もりやまひでこ
石橋美術館)

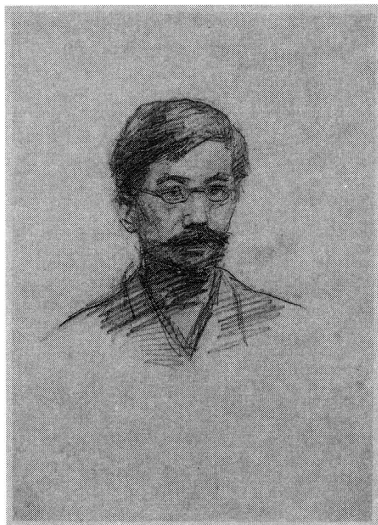


fig.24 青木繁《平島氏像》1910年
鉛筆・紙
晴明会館(晴明教)蔵

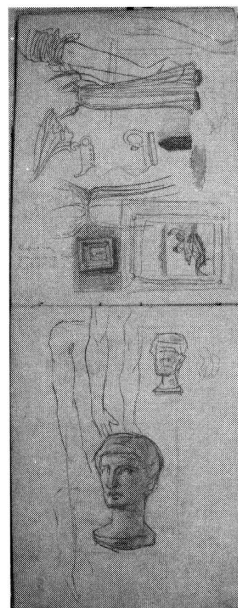


fig.25 青木のデッサンである可能性の高い松田スケッチブックの1ページ
〈資料8〉明治42年6月～10月のスケッチブック